

二つの「おおきなかぶ」

—西郷訳と内田訳をめぐって—

菅 邦男

はじめに

周知のように、ロシア民話「おおきなかぶ」には二つの日本語訳がある。一つは西郷竹彦訳の「おおきなかぶ」(アフナーシェフ)であり、もう一つは内田莉莎子訳の「大きなかぶ」(トルストイ)である。これらはともに、小学校一年生の教科書教材として、西郷訳は光村図書に、内田訳は東京書籍その他にそれぞれ採用されている。ここでは、この二つの訳がどのような違いを持つか、また教材として見た場合はどうなのか、等について若干述べてみたい。もっとも、これらの事については恐らく諸所で論じられ

ていることと思う。それらについては、時間的な余裕が無く、参照することが出来なかったのも、あるいは二番煎じ的な点も出てくるかとも思う。前もってお断りしておく。

I

内田訳と西郷訳の違いで、まず問題になるのが一行めである。西郷訳が「おじいさんが、かぶのたねをまきました。」となっているのに対し、内田訳では「おじいさんがかぶをうえました。」となっている。この「かぶをうえました」という表現については疑問を持つ人が多いらしく、内田莉莎氏は、寄せられる質問や指摘の中で「最も多いの

は、『おじいさんが、かぶをうえました。』という文章に対するものです。かぶを植えるとはおかしい、かぶは種子をまくものではないか、という指摘です。」と言っている。

この指摘に対して内田氏は、次のように反論している。「しかし、私はここはやはり植えたとしたいのです。まくとうえるとはまったく違います。まくというのは複数の種子をばらばらまくことです。ぱらっと種子をまいて、どつ土の中に埋めこむことです。ぱらっと種子をまいて、どうしてとてつもなく大きなすてきなかぶが育つでしょうか？ おじいさんが愛情をこめて一つぶの種子をうえた。となぜ考えられないのでしょうか。」(教育出版指導書)

言わんとしていることは良く分かるが、「なぜ考えられないのでしょうか」と言われても、それは無理というものである。「かぶをうえました」とあれば、文字通りかぶの苗を植えたと取るのが普通である。かぶが種子をまくものだ(当時のロシアのやり方は知らないが)と知っている大人たちは「変だな」と思うだろうし、知らない子どもたちはそのまま、かぶを植えたのだと思うに違いないのである。「かぶのたねをうえました。」とあれば、種は植えるものだろうか？ という疑問はあまり出てこないのではないか。内田氏の言う「愛情をこめて一つぶの種子をうえた」と考へることは容易なはずである。

青青として生きのよい葉っぱまでが、それこそ生き生きと想像される。

これに対して西郷訳では、甘いのは同じだが、大きさを表す表現が「おおきなおおきな」となっている。これが強調表現であることは言うまでもないが、「とてつもなく」に比べて、その大きさが漠然としており、具体性に欠けている。従って、どれくらい大きいかが、子どもには具体的にイメージしにくいのではないかと思われる。ある意味では単純化されているのであり、スマートな文体なのである。このスマートさは、西郷訳の全体を貫いている。

なお、ある教科書では、内田訳を書き換え、「あまそうな、げんきのいい、びっくりするほど大きなかぶができました。」とあったが、これは、「食べてみないと甘いかどうかは分からない」という理屈と、「とてつもなく」という言葉が小学一年生には難しいという理由によるものと思われる。

しかし、これは民話である。民話の世界においては、甘いと云ったら甘いのである。甘そうな、というような不明確な、つまり、食べてみなければ本当に甘いかどうか分からないような表現ではなく、「あまい」という断定表現によって甘さを保証しているのである。

「とてつもなく」については、分からない言葉を教えてや

西郷訳の方は「たねをまきました」とあるが、内田氏の言うように、まくとは「種を散らし植える」(日本国語大辞典)ことである。従って、この表現からは、複数の種をまき、その中の一つが「おおきなおおきな」かぶになったかのように受け取れる。しかし、「あまいあまい、おおきなおおきなかぶになりました。」以後の断定的表現からは、最初から一粒だった印象を受ける。おかしいと言えば、西郷訳もおかしいのである。

従ってこれは、こう表現するとすれば、「かぶのたねをうえました」「かぶのたねを一つぶまきました」とあるところであろう。書きなおすべきだということではないが、いづれにしろ、授業にあたっては補説が必要であろう。

(二)

次に、大きくなったかぶの描写であるが、内田訳では、「あまい、げんきのよい、とてつもなく大きいかぶができました。」とあり、西郷訳では「あまいあまい、おおきなおおきなかぶになりました。」とある。

この二つを比べて感じるのは、内田訳の具体性である。甘くて元気がよく、とてつもなく大きいかぶ、と具体的な描写がなされている。「げんきのよい」という表現からは、

るのも国語教育のうちと言えば足りるだろう。「とてつもなく」という言葉は、的確に使われていると思う。

(三)

第三に、「 かぶはぬけません」という部分の接続詞・副詞の違いがある。

〔内田訳〕

- イ、ところが、かぶはぬけません。
- ロ、それでも、かぶはぬけません。
- ハ、まだまだ、かぶはぬけません。
- ニ、まだまだ、まだまだ、かぶはぬけません。
- ホ、それでも、かぶはぬけません。
- ヘ、やっと、かぶはぬけました。

〔西郷訳〕

- イ、けれども、かぶはぬけません。
- ロ、それでも、かぶはぬけません。
- ハ、やっぱり、かぶはぬけません。
- ニ、まだまだ、かぶはぬけません。
- ホ、なかなか、かぶはぬけません。
- ヘ、とうとう、かぶはぬけました。

両者の違いは、各語間の関係において、内田訳が必然的

つながりが見られるのに対し、西郷訳の方は相互関係がやや薄い点にある。

内田訳を見てみる。まず、おじいさんが、とてつもなく大きくなったかぶを「うんとこしょ、どっこいしょ」と抜こうとするのであるが、ここは当然、おじいさんは、かぶは抜けると思っただけである。そのおじいさんの意に反して、かぶは抜けなかったのである。従って、「とところがかぶはぬけません」とした方が、西郷訳の「けれども」よりも、おじいさんの内的な驚きが良く出ると言える。

かぶが抜けなかったのも、おじいさんはおばあさんを呼んで来るのであるが、「それでも」抜けないのである。更に孫を呼んで来て引っぱってみるが、それでも「まだまだ」抜けないのである。犬を呼んで来て「まだまだ、まだまだ」抜けないのである。そこで猫を呼んで来るのだが「それでも」抜けないのである。そして最後にネズミが加わって、「やっ」とかぶは抜けるのである。

つまり、内田訳は、各語が関連して使われているため、次第に強調の度合が増して行き、その結果、最後の「やっ」とに至り、かぶが抜けた時の「フーッ／＼ やれやれ」といった様子が実にリアルに実感として生き生きとイメージされるのである。

西郷訳の方は、そういう意味では、各語間のつながりが

メージされ、「なかなか抜けない感じ」が、よりよく出ると言えよう。

内田訳の場合、新しい登場人物から順に、後から前へと視点が移り、しかも小から大へという順序なのでいつも最後に「かぶ」が来て、そこへ視点が据えられて「うんとこしょ、どっこいしょ」となるから、常に「かぶ」の大きさが印象づけられ、なかなか抜けないという感じが出るのである。

西郷訳の場合は、逆に「かぶ」から新しい登場人物へとという順序で、いわば大から小へという形になるため、「かぶ」の大きさよりも、それをひっぱる人物たちの方に視点があてられることになる。つまり、大から小へという形態のおもしろさと、リズム感の方より印象的なのである。

この、「かぶ」よりも「それを引く人物たち」の方に重点が置かれる描き方は、必然的にこの作品のテーマの問題と関ってくる。

つまり、西郷訳の場合は、この大↓小へという形態を重視するため、登場人物たちの協力・団結というテーマが出やすいということである。特に、引き抜く側に視点が置かれているため、小さい者の力、協力という点が強調されやすい。最後に、「とうとう、かぶはぬけました」という終り方になっているのは象徴的である。皆で力を合わせて

薄いと言えよう。それは、最初の「けれども」の語の使い方によるものと思われる。「けれども」では、抜けると思っていたおじいさんの、意外にも抜けなかった時の気持、驚きが出て来にくいのである。従って、語の使い方自体には問題は無いが、やや平板に流れる感みがある。

そして、この接続詞・副詞の使い方は、当然、登場人物の配列の仕方と密接に関係して来る。

四

登場人物の配列の仕方と言ったが、並ぶ順序が違うというのではない。西郷訳が「かぶをおじいさんがひっぱって おじいさんをおばあさんがひっぱって、おばあさんをまごがひっぱって、まごをいぬがひっぱって」となっているのに対して、内田訳は、「犬がまごをひっぱって、まごがおばあさんをひっぱって、おばあさんがおじいさんをひっぱって、おじいさんがかぶをひっぱって」と、ちょうど逆の順序に視点が動いているのである。

西郷訳では常に「かぶ」から登場人物へ、内田訳では逆に、登場人物から「かぶ」へと視点が移動していくのである。

結論から言うと、内田訳の方が、「かぶの大きさ」がイ

「とうとう」抜いたという意識が裏にあるわけである。

「ところで、これは単に変化をとまなう反復Vであるだけでなく、人物が増えていくにしたがってかぶのイメージがますます強大なものとなっていく反復です。(略)このような△反復Vの方法は、かぶのイメージを強調するだけでなく、それとの対比において、最後に登場してくるねずみのイメージを一举にクローズアップする効果をもねらっているのです。」(光村指導書)という西郷氏の言葉の謂である。

しかし、前述したように、「かぶのイメージがますます強大なものとなっていく」効果は、むしろ内田訳の方が大きいと言える。常に、なかなか抜けないかぶに主点が置かれているからである。それに、「ところが」「それでも」等の接続詞・副詞が効果的に使われ、最後に、ああ「やっ」とぬけた／＼ということになるのである。

この行き方からは、ぬけないかぶを非力な者たちがいっしょうけんめい力を込めて抜こうとするがなかなか抜けないことのおもしろさ、そして、やっ／＼と抜けた時の解放感が第一の主題となる。それに、非力な者たちの「協力」が加わるのである。

ここからは、ネズミに代表される特に小さな者の力(存在)を大事にしようといったような西郷流の考え方は出て

来ない。全員が程度の差こそあれ、非力な存在なのであり、それらが協力して「やっ」とかぶは抜けたのである。

結局、内田訳は民話としての特性を色濃く残したものであり、西郷訳はそれに比べると、現代風に、リズム感のあるスマートな形に再話したものだといえよう。内田訳が民話の持つ「おもしろさ」を主にしているのに対し、西郷訳はテーマ（思想）性を主にしているのである。

従って、指導する際も、内田訳は「やっ」とぬけたという喜びを実感として味わわせ、そうしたかぶを抜く動作化等によるおもしろさを通して協力の大切さをとらえさせて行くのに対し、西郷訳の方は、おもしろさと同時に、というより、むしろ「小さい者の力を大事に」ということを学ばせることが主な目的となる。

どちらの訳を採るか個人好みや考え方もあり、断定は出来ないが、こうした作品においてはやはり、おもしろさが第一であり、そこに描かれた世界を楽しむにしながら協力の大事さを学ばせていくのが本来の在り方ではないかと思う。西郷訳にしても、あまりテーマ主義に陥ると、民話としてのこの作品のおもしろさも半減するのではないかと思う。

西郷氏は、「かぶを引っぱる語りの順序」について、「いわゆるロシア語の忠実な訳ということでは内田訳でいいの

ですが、それにこだわるよりも、日本語表現の常識的な在り方を考えて、この再話を採用しました」と述べているが、確かに常識的にはその通りである。

しかし、リズム感のある、現代風の文体が、逆に全体的にひっかかりが無く、流されやすいきらいがあるのも事実である。

内田訳は、一読した時、日本語として奇異な感じを抱くのも事実である。しかし、よく読んで行くと、民話としての特性をよく活し、盛り上がりのある描写になっていることが分かる。その民話としての泥くささと、盛り上がり捨てる難い魅力なのである。

